

源氏物語爪印　－鈴虫巻－

村　井　利　彦

【1】夏から語りは始められる。前巻が、秋で終わっていたから、冬と春が省略されている。この間、夕霧の恋も女三宮の信仰も充実拡大していたものと想像される。光源氏の女三宮への思いもよい方向に変化していったはずである。そして、薫も順調に成長していつているものと思われる。

【2】蓮の花盛りのころ、女三宮の持仏供養が行われる。これは、極楽のイメージで。「持仏どもあらはしたまへる」(345)という記述からして、あらたに持仏を造り、その開眼供養だと推測される。後に「御念誦堂のはじめ」(349)とあるから、念誦堂もこの時完成したことが分かる。女三宮の仏道生活も、いよいよ本格化してきたということであろう。⇒【1】。ならば、前々巻の柏木に引き続き、女三宮の再評価を語るのがこの巻の目的であろうか。以後の女三宮の生涯はこの持仏とともにあり、最終の到達点に、この目の前にある蓮の花盛りの世界があるという暗示とも読める。また、前巻の「想夫恋」の原義「相府蓮」がきいているという読みはどうだろうか。この時、紫式部は、やはり「想夫恋」の原義を知り、これを利用しているということになるが。いかなものであろう。⇒横笛巻【33】【63】。

【3】光源氏と紫上が、女三宮の持仏供養の用意を行う。光源氏は、「御念誦堂の具」(345)を、紫上は「幡」「花机の覆」の染色、「七僧の法服」(349)。描写が具体的である。この、女三宮の仏道生活の描写は、紫上のこの時期の、見果てぬ夢を描いてみせているという並行的読みも必要かと思う。

【4】「夜の御帳」(345)を仏壇とし、その帷子を「四面ながら上げて」法華の曼陀羅を後ろにかけて、蓮の花を「銀の花瓶」に飾り、香は「唐の百歩の衣香を焚き」、白檀で作った「阿弥陀仏、脇士の菩薩」、つまり観音勢至の両菩薩像を据えたのである。豪華な装置である。仏壇は、本来、夜の御帳であったのかもしれない。大原三千院の往生極楽院の内部等を想像しておけばよいのではない

か。

【5】「法華の曼陀羅」は、法華変相図の可能性もあるが、ここは恐らく法華經「見宝塔品 第十一」を絵画化した曼陀羅のことだろう。見宝塔品にしたがって解説すると、次のようになる。釈迦が法華經を説く現場に、突然壮麗巨大な塔が湧出する。中から法華經を賛嘆する不思議な声が響く。中に誰がいるのか。塔の扉をあける条件として、三千世界に展開說法する釈迦の分身諸仏が一堂に集められる。一堂の眼前で、宝塔の扉を釈迦があける。中には多宝如来がいた。多宝如来は、法華經が説かれる所に必ず湧き出すという大誓願を前世でもって入滅した仏であった。半座を譲られて釈迦如来が塔に入り、多宝如来と並び座って、宣言する。私は間もなく死ぬ。この法華經を、御前たちに委ねる。という劇的瞬間を絵画化したものである。曼陀羅は本来密教のもので、真言密教では、ご承知の通り、金剛界・胎藏界の両界曼陀羅が有名で、信仰の中心は大日如来である。密教に後れを取った天台においては、伝教大師死後、慈覚大師・智証大師によって教義の密教化が大胆におしすすめられ、金剛界大日如来を釈迦如来に、胎藏界大日如来を多宝如来とし、宝塔の中で両者が說法する曼陀羅を完成している。「理智不二」の教説であるといわれる。この鈴虫巻持仏供養の場面は、その天台密教の具体的表示として注目されるのではないかな。なお、法華經をここで強調しているのは、「提婆達多品」に娑喝羅竜王の娘が、一旦男となり、たちまちに成仏した説話を載せていることと無関係ではないだろう。女三宮の成仏への暗示、あるいは飾りとしてこの「法華の曼陀羅」は掛けられているのだろう。

【6】「荷葉の方を合はせたる名香、蜜を隠しほほろげて、焚き匂はしたる」(346)。これも、具体的で、興味深い描写である。荷葉の荷は蓮の意味で、夏の薫香である。「ほほろぐ」は、含ませる意味か。蜜で、七種の香木香草をからめ練り合わせたものと知れる。

【7】「経は、六道の衆生のために六部書かせ」(346)、女三宮の持経は、光源氏自らが書いた。「これをだにこの世の結縁にて、かたみに導きかはしたまふべき」趣旨を願文に作った。さらに法華經に加えて阿弥陀經も光源氏が書いた。唐の紙は弱いから、「紙屋の人を召して」特注の紙をわざわざ渡かせ、春の頃より入念に書いたという。これは言うまでもなく光源氏の、女三宮に対する愛情の表現である。一時とは相当の様変わりである。時は移り、光源氏の女三宮に対する蟬りは、もはやない、といえそうである。⇒【1】

【8】光源氏の書いた経には、金の罫線が施されていた。これ、原稿用紙は、この写経が起源となったものであろう。

【9】夏の行事は珍しい。西の廂に、「所狭く暑げなるまで、ことごとしく装束きたる女房、五六十人ばかりつどいたり」(346)とある。女房たちが正装して控

えている。夏の暑い盛りである。そうとう大儀であつたのではないかと推測される。光源氏の言葉より推察するに、その時、「講説」がはじまっているにもかかわらず、座は静まっていない。人は北廂まであふれ、童女は、簀子の方を動き回っている。薫香も「けぶたきまであふぎ散ら」して、いささか度をこして焚きすぎであつた。光源氏の理想とする法会には遠い。女三宮は、あまりの「人氣におされたまひて、いと小さくをかしげにて、ひれ臥したまへり」(347) といった有様。紫上の持仏供養なら、もっと品よく行われたであろうと想像される場面である。しかし、当日の盛儀は、女三宮生涯最後の栄華ではないかと思わせる。多数参加した親王。帝と朱雀院からの使い。そして、七僧を呼んだ「世の常ならざりける」(349) 大法会。

【10】「空に焚くは、いづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ」(347)。そらだきもの、の要領である。兼好法師は、この条を意識していつているのだろうか。

【11】「若君、らうがはしからむ、抱き隠したてまつれ」(347) と光源氏が言う。薫はいま三歳。やんちゃ盛りなのである。

【12】女三宮の方は相変わらず変わった節は見受けられない。彼女が光源氏を見限っているのは事実であり、自分の気持ちを素直に歌にするまでである。「君が心やすまじとすらむ」(348)。正直すぎるのは、いかにもはしたないが、これでは彼女の蟠りは、生涯消えそうにない。もっとも、この台詞、女三宮の光源氏に対する甘えという側面があることも見逃せない。この頃光源氏の愛情が戻ってきているという自信が、言いたいことを彼女に言わせるという側面である。そう解釈する余地を残した口ぶりである。彼女は、いま自分の立場に満足しているのではないか。そう考えたい。

【13】紫上の世話ぶり。「七僧の法服など、すべておほかたのことども」(349) は皆、彼女がした。「綾のよそひにて、袈裟の縫目まで、見知る人は、世になべてならずとめでけりとや」(349)。作者はこれを、「むつかしうこまかなることどもかな」と記した。そう書きながら、これが、こまかなどうでもよいことなのではなく、この「見知る人」の眼こそ、このあたりを読む読者の眼であつてほしいと願って書いているのではないか。紫上は、いま、女三宮の陰に隠れてみえないけれども、見る人、あるいは見える人には見えるはずだ。もはや完全に出家の用意が整っているところ。是非にも見てほしいと願って書いているのではないかと思う。⇒【3】。

【14】講師が述べた趣。女三宮は「この世にすぐれたまへる盛りを厭ひ離れたまひて、長き世々に絶ゆまじき御契りを、法華經に結びたまふ尊く深きさま」(349) は、まことに立派である。女三宮の出家は、傍目には、まさしくこの通りなのである。「皆人しはたれたまふ」(349) は当然である。

【15】光源氏は「ただ忍びて」と、この日の仏事を思っていたらしいが、帝も朱

雀院も知るところとなり、布施が「夕の寺に置き所なげなるまで」という盛儀となった。考えてみれば、女三宮は、朱雀院と帝を後ろ楯にもった最高の女性であったこと、いまさらながらに読者に見せつける。といったところか。

【16】「今しも心苦しき御心添」う光源氏。見苦しいというべきか。これが人生だというべきか。光源氏の三宮への愛は、女楽の当時に戻っているということか。

⇒【12】。若い盛りの身である女三宮にとっては不安材料であろう。光源氏は、朱雀院からの別居の勧めを断固拒んでいる。それでも、「御処分の宮」三条宮の整備に余念がない。倉をさらに建てましている。このあたりの光源氏の態度は、朱雀院が願ったとおりの結果となっていて、朱雀院もさぞかし満足していることだろうと思われる。

【17】「御封のものども、国々の御庄、御牧などよりたてまつるものども、はかばかしきさまのは、皆かの三条の宮の御倉に納めさせたまふ」(350)。光源氏の財政的基盤を推測させる珍しい記述である。女三宮は、こうして財力を保証される上に、莫大な朱雀院よりの遺産を相続していた。これらは皆、薫の経済力の源泉となるものであることに留意しておきたい。

【19】秋。六条院の改修記事がある。「西の渡殿の前、中の堀の東の際を、おしなべて野に作らせたまへり」(351)。光源氏の、これも女三宮への愛情表現。『源氏物語絵巻』に残っている図柄が参考になろう。

【20】女三宮を慕って、出家した女房が「十余人ばかり」(351)いた。光源氏が厳選して許可した人々である。この中に小侍従がいるやいなや。ここには何も触れられていないけれども、作者の処置が注目される。

【21】「この野に虫ども放たせたまひて」(351)。かつて秋好中宮がそうしていた場面が思い出される。⇒野分巻【32】。この場面は、したがって、巻の後半に秋好中宮が出てくる心理的必然性となっていると思う。「中宮の、はるけき野辺を分けて、いとわざと尋ね取りつつ放たせたまへる」(352)と後に記されている。

【22】女三宮を「なほ思ひ離れぬ」(351)光源氏。前に記された出家女房にたいする教訓と矛盾しているところが可笑しい。そういう光源氏と、光源氏から完全に離れてしまった女三宮の心が明確に記されている(351～2)。「人離れたらむ御住ひにもがな」(352)と彼女は思っているが、まだそれを主張するにいたっていないのみ。この女三宮の現状は、陰に隠れた紫上の現在の心を照射させる光となっているのではないか。⇒【3】【13】。

【23】八月十五夜。女三宮のところにやって来た光源氏が松虫鈴虫の論をやる。松虫は名ばかりで命短い。なつきにくく、「人間かぬ奥山、はるけき野の原に、声惜しまぬ」「いと隔て心ある虫」。一方「鈴虫は、心やすく、今めいたるこそらうたけれ」(353)と光源氏は解説する。光源氏は女三宮に鈴虫を期待している。しかし、女三宮、どうみても松虫ではないか。そのことを語る目的もこの巻に

は確かにある。⇒【22】。

【24】秋好中宮も松虫が好きであった(352)。これも、暗示的記述である。秋好中宮も光源氏を離れて、現在の女三宮の心境にあるのではないか。いまから後半に注目である。さても、紫上はどうなのであろうか。と気になるところである。昔は鈴虫であったが、はたして今はどうなっているだろうか。松虫になっているのではないか。と読者は自然に連想しよう。

【25】松虫と鈴虫とは現在のものとは逆である。どうして、どういう事情で入れ代わったのか。はるかな山野に松虫、身近な世界に鈴虫というイメージが源氏物語にはある。壬生忠峯「新和歌序」によれば、山⇒松虫(⇒松風)⇒琴の音。野辺⇒鈴虫⇒谷の水音という観念連合が認められる。⇒『夫木和歌抄』。これに従えば、昔の松虫はリリリンと鳴く今の鈴虫。昔の鈴虫はチンチロリンと鳴く今の松虫であると推定される。現在は、その鳴き声によって逆転しているのであって、この逆転現象は、江戸時代から始まったと思われる。しかし、専門に虫を扱っている店では、正しく呼ばれ、売られていたことが、『花月草紙』の一文で確認される。

【26】この時歌った女三宮の歌はけっして冷たい歌ではない。光源氏にあきらめたことは分かっている。しかし、なかなか光源氏への未練は絶ちがたい。という解釈の余地を残している。「いとなまめいて、あてにおほどかな」歌である。いつもの取りつく島のない態度とは違う。珍しくリップサービスを心得た歌でもある。これは、去り行く女三宮に対する作者の、せめてものはなむけかもしれない。⇒【12】。女三宮、その心の中の松虫は動かしがたい。しかし、鈴虫にも見えなくはない女三宮。名残惜しい別れの雰囲気、こういうイメージで作者は飾りたかったのではないか。

【27】貴方はまだ若く魅力的だ、と光源氏が歌って得意の琴(きん)をひく。松虫からの連続性に着目したい。⇒【25】。さて、ここは若菜巻、女楽の場が想起されよう。光源氏自ら女三宮に琴(きん)を教えた日々。女楽の成功。余韻に酔うた日のこと。あれが、女三宮の絶頂期であった。この時、女三宮は「数珠引きおこたりたまひて」耳を傾けている。十五夜の月の光の中で、「はかなく移り変る」世を思って弾く光源氏の心情もやるせない。この名場面もまた、いろいろあったが、女三宮へのはなむけとなっている。しかし、これは、最高のはなむけだろう。この持仏供養は、女三宮の過去の栄光と現在の幸せ、将来の確かさの、さりげない表現なのである。琴(きん)が、現在と過去を取り結び、琴(きん)、松風、松虫の観念連合が、「ふり捨てがたき鈴虫の声」のなかで、「隔て心ある」女三宮の現在を暗示するという構図。なかなかゆきとどいた計算のなされた名場面だと思う。

【28】女三宮の再評価は、その子・薫へと源氏物語の力点が移行することと連動

していることを忘れるべきではない。⇒【18】。

【29】 蛭兵部卿の登場(354)。これからは、彼の登場場面もだんだん少なくなってゆくのではないか。人生の心細さ、そこはかとなく。

【30】 この年は宮中の月見の宴が中止になったとある。理由については記されていない。結果、さびしい貴族たちが六条院に大勢集まった。

【31】 管弦の遊びにつけても思い出すのは柏木。女三宮に充分聞こえるところで、光源氏が「故権大納言、何のをりをりにも、亡きにつけていとどしのぼるること多く、公私、もののをりふしのにほひ失せたるここちこそすれ。花鳥の色にも音にも思ひわきまへ、いふかひあるかたの、いとうるさかりしものを」(354～5)と柏木を絶賛するのも、この巻らしい。これは、光源氏の女三宮へのメッセージである。あのことはもうなんとも思っていないのだよ。しかし、そう言いつつも、御簾のなかでこの言葉を聞きのがすことはないであろう女三宮を意識せざるを得ない光源氏の、心の底、「片つかたの御心」に言及する作者は、きっと、決然として出家の道を選んだ女三宮の正さを示唆したかったのかもしれない。

【32】 光源氏の言葉「今宵のあらたなる月の色には、げになほわが世のほかまでこそ、よろづ思ひ流さるれ」は、湖月抄が指摘したように、白氏文集卷十四「八月十五日禁中独直対月憶元九」のなかの有名な一節「三五夜中新月色 二千里外故人心」を踏まえた表現であると思われる。だとすれば、柏木は元九、つまり「広陵」の元慎に相当する。この場合、光源氏は白楽天で、白楽天と元慎が無二の親友であることはいうまでもない。ならばここで、柏木を光源氏が元慎だと認めていることになる。柏木・横笛と続いた柏木評価のため押しである。あはれ衛門督。

【33】 「こよひは鈴虫の宴にてあかしてん」。これが、この巻のテーマ。あるいは、光源氏の願望だといえよう。あらゆることは恩讐の彼方に。すべて許そうという心境を、「心やすく、今めいたる」鈴虫に託しているのではないか。

【34】 冷泉院の誘い。それを受け、鈴虫の宴を捨てて、全員を引き連れて冷泉院に向向く光源氏。親子の絆、血の連続性は、人を素直にする。「恩愛」のテーマ。さても、光源氏は今や准太政天皇である。出掛けるのは行幸に準ずる。実は大変な事であったはずである。が、「いにしへのただ人ぞまにおほしかえりて」突然の訪問となった。柏木巻の朱雀院の突然の六条院訪問を彷彿させる場面である。人々も直衣に「下襲ばかりたてまつり加え」て、略式ながら威儀を正している。源氏物語絵巻に描かれたような格好になったわけである。

【35】 「ねびととのひたまへる御容貌、いよいよことのならず」(357) という冷泉院の登場は、女三宮と対になる構想であろう。罪を持ち、あるいは持たされた、運命の人という関わりである。「いみじき御盛りの世を、御心とおぼし捨てて、

静かなる御ありさまに、あはれ少なからず」(357)は、持仏開眼供養の日の女三宮評価そのままではないか。⇒【14】。冷泉院を後半に登場させる心理的必然性が、ここにある。

【36】光源氏の秋好中宮訪問。「われよりのちの人々に、かたがたにつけて後れゆくこちしはべる」と光源氏は言う。この時期の、正直な感想であろう。死に別れもあるし、出家という生き別れも含め、彼はいま孤独への恐怖を感じ取っているというべきか。女三宮、柏木。そしてまもなく紫上、さらにはこの秋好中宮。

【37】光源氏は、前々から、出家後のことを秋好中宮に託していた(358)。特に、後に残る女性たちの世話は、女性の実力者の庇護が必要と考えていたものと思われる。紫上のことなど、夕霧に依頼するわけにもいかない。依頼したら女二宮になるばかりであろう。「春宮の女御」(361)とて、秋好中宮の後ろ楯を必要とする。そんなこんなで、光源氏としては、秋好中宮が出家することは、断然反対しなければならない個人的事情があったと解釈すべきである。

【38】秋好中宮が「例の、いと若うおほどかなる御けはひ」(358)をしていたとあるが、彼女はすでに四十を越えている。思えば彼女は、光源氏の兄朱雀院の結婚相手として相応しい世代の人であったはず。従って光源氏と同世代。年齢からいっても、秋好中宮の出家意識は自然なものというべきであろう。光源氏の出家意識が自然であったように、である。光源氏は、それが分かっていない。

【39】秋好中宮は、母六条御息所の噂をほぼ完全に把握している。紫上瀕死の件、女三宮出家の件。「みづからだにかの炎をもさましはべりにしがな」とある。餓鬼道に堕ち、逆様に吊られて炎のなかにあった目蓮の母のことをイメージしていたものと想像される。

【40】出家を切望する中宮に光源氏の不許可。「その人まねにきほふ御道心は、かへりてひがひがしうおしはかりきこえさする人もこそはべれ。かけてもあるまじき御こと」(359)は、いかにも酷い言葉ではないか。彼の本音が、自分が出家した後を、中宮に依頼して、後顧の憂いなきを期す(358)ところにあるとすれば、これは光源氏のエゴ以外のなにものでもない。思えば、光源氏の秋好中宮に対する態度は、その結婚からして自己都合の得手勝手で、彼女と朱雀院との意思を無視した政略結婚そのものであった。この点では、今日まで、終始一貫しているといえよう。また、これが、人生を捨てる寂しさの表現だとすれば、彼の出家そのもののなまぬるさの表示でもあろうか。彼は、彼同様の心でものを言っている人を否定している。これは、己を否定することにほかならないからだ。いずれにしても、光源氏のイメージは、ここでマイナスになりこそすれプラスに転ずることはない。

【41】「深うも汲みはかりたまはぬなめりかしと」秋好中宮が光源氏を「つらう思

ひきこえたまふ」(359)のは当然であろう。この場面を、光源氏が秋好中宮をも失う場面と捉えるのは考えすぎだろうか。秋好中宮の孤独感は光源氏の孤独感でもある。なお、さらに深読みをすれば、出家の真意を分かってもえぬ秋好中宮の姿の背後には、同じく出家を志しながら、光源氏の反対で思うにまかせぬ状態にある紫上の姿がある。この巻は、紫上を描かずに描く機能をもたされた巻ではないのか。次の夕霧巻と同じように。

【42】秋好中宮の出家意識のよってきたところは、明確に書かれている。母・六条御息所の霊の噂を聞き、悪道に落ちている母の霊を救う為であって、本人自身の為ではない。餓鬼道に落ちていた母を救った目蓮の行為を彼女は実現したいのである。⇒【39】。ここに、強烈な血の脈絡がある。これは、さりげないが確実に流れていた、この巻の地下伏流が、巻軸において一気に地上に噴出した趣であろう。女三宮一薫、光源氏一冷泉院、秋好中宮一六条御息所。「恩愛」のテーマである。釈迦として涅槃の時、息子ラゴラとの対面に拘った。恩愛は決して仏法の正道から外れているものではない。孝行な娘や息子が仏果を得る話は『今昔物語』などに多く記されている。

【43】目蓮のイメージの提出も、血の脈絡の強調である。愛が血のレベルにあることに注意したい。これは、もっとも寂しい愛であり、ぬきさしならぬ愛の形でもある。源氏物語後半のメインテーマ。

【44】目蓮になりたいという秋好中宮にたいして、それは出来ないことだという光源氏の言葉は、実に冷たい。その理由として、「目蓮が仏に近き聖の身」(360)であったことをあげているのでなおさらその感がある。あなたは五障の女。ましてや神通第一の目蓮とは違うのだ。この件は私に任せなさい。「みづからの勤めに添へて、今静かに」(361)。この条はこの理解でいいのかもしれない。しかし、もうすこし目蓮に接近すると、いささか事情が違ってくるのではないかと思う。『三宝絵詞』二十四「孟蘭盆」によれば、目蓮は自力で母は救えず仏の力を借りて逆さに吊るされた炎の中の母を救ったのである。このことを、紫式部は知らず「たちまちに救ひけむ」と言ったのか。あるいは、わざわざ光源氏にそう言わせて、光源氏の無知を暗示し、秋好中宮の理解されぬ悲しみを強調しようとしたのか。また、こうも考えられる。光源氏を目蓮になぞらえて、目蓮がそうしたように、光源氏に仏に頼んであげると言わせたのかもしれない。この方が、成功の見込みからいえば確率は高い。こちらの発想に立てば、作者は孟蘭盆のことを知悉していたことになる。

【45】光源氏の今の気掛かりは「春宮の女御」でも夕霧の「大将」でもなく、冷泉院のみ。冷泉院も光源氏とこのように気軽に行き来したいがために譲位したのだ。親子の愛。恩愛の強調だが、これは出家の最大の障害物であることにはかわりない。

【46】最後に、秋好中宮の母・六条御息所を思う気持ちを点出する。今は「ただ人の仲のやうに並びおはします」という傍目には仲睦まじい夫・冷泉院ではなく、「ただかの御息所の御ことをおぼしやりつつ、行ひの御心進みにたる」(362)心境にある。母への回帰である。これも恩愛。血脈に問題は帰着する。

【47】秋好中宮が「功德のことを立てておぼしいとなみ、いとし心深う、世の中をおぼし取れるさまになりまされたまふ」(362)ということは、彼女が目蓮になって、盂蘭盆供養をしているということであろう。⇒【44】。

(注) 本文は新潮日本古典集成「源氏物語」に依っている。括弧内数字はその所在箇所を示している。

